感想文特選作品紹介

「町民読書感想文・感想画コンクール」より

「第2回川根本町町民読書感想文・感想画コンクール」特選作品の紹介 第２回目（中学生・高校生・一般作品）です。

◆ｉｔと呼ばれた子

本川根中１年
長嶋明穂

この本は、ぎゃくたいを受けている子どもの話です。ノンフィクションであり、ぎゃくたいを受けている子どもの気持ちがとてもわかり、ぎゃくたいの怖さやふつうの家庭の良さがわかる話です。この本の作者は、この本の中の主人公でもあります。過去にあったできごとを思い出しながら、作者は何を思ったのでしょうか。私はそう思いながら考えてみました。私が思う作者の考えは、家族はとても身近でとても大切なもの、愛されても愛されなくても一生けん命生きてほしいということだと、私は思います。

この本を読んで、私はこの話がノンフィクションだと思うと、主人公があまりにもかわいそうで心が痛くなりました。でも、その中でも最も心が痛くなった場面は二つあります。一つは、主人公に向かって母親が包丁をさしたことです。この場面では主人公がお皿などを洗っていて、母親が指定した時間までに間に合わなかったので、包丁で主人公をさしたという場面です。この場面を読んでいた時、私は「間に合わなかったくらいで、包丁でさすなんてひどい母親だ。」と思いました。

二つ目は、ずっと味方だった父親が、母親と上手くいかないだけですべて主人公のせいにしたという場面です。この場面では、主人公が母親からぎゃくたいを受け始めたころには、いつも父親が主人公の味方でした。そしてある日には、主人公と父親は「この家を一緒に出よう。」という約束もしていました。どんどんぎゃくたいがエスカレートしていく内に、父親と母親の仲が悪化していきました。仲が悪くなった原因を主人公のせいにして、ついには主人公をいつも怒鳴りつけ主人公を愛しませんでした。私はこの場面を読んでいた時に、「母親も父親も主人公を愛さなくて、一体誰が主人公を愛するの?」と、疑問に思ってしまいました。私は、完全に父親と母親を悪く言っています。でも、主人公は私の意見と全くちがいました。主人公は、自分が悪い子だから、父親と母親の仲が悪くなってしまったと思っています。自分は愛されたいという気持ちを持ち、なぐられてもけり飛ばされても、怒鳴られてもいつも前向きでした。私は、そんな主人公はすごいと思いました。私は、いつもささいなことでマイナス思考に考えてしまいます。親からはぎゃくたいを一度も受けたことがありません。そうやって主人公と私を比べてみると、主人公の考えがとてもすごいと感心してしまいます。愛されたい、誰からにも好かれたいという主人公をそんけいしています。私は、この本を読んでいた時には心が痛くなり、ついには泣いてしまいました。そして、ぎゃくたいの場面を想像してみると恐ろしくなり、「自分の家族は幸せなんだ。」と思いました。

私がこの本から学んだことは、三つあります。一つ目は、家族は大切であることです。とても身近だけど、愛する人がそこにはいるので家族は大切です。二つ目は、どんな時でも前向きに生きていくことです。マイナスに考えてしまうと、自分が発揮できる場面でも「ああ。失敗しちゃうんだな。」と思ってしまい、自分はダメダメ人間なんだと思ってしまうので、どんな時でも前向きに一生けん命、かべを乗りこえて生きていこうと思います。

最後の三つ目は、今の自分が幸せであることです。私は、ぎゃくたいを受けたことが1回もありません。これはとても幸せなことだと思います。いやなことがあっても、けんかをしてしまっても、受け止めてくれて、「次はがんばらなきゃ。」と思わせてくれて、いつも私を愛してくれている人がいるからこそがんばれます。たとえ私が怒られても、「それは私を愛している証拠だ。」と思っています。なので、今、私や私の姉たちはとても幸せです。家族が私を愛している分、私もその倍、家族や周りの人たちを愛していきたいです。世の中では、「お金が一番だ。」と言っている人たちがいますが、私は家族と愛が一番だと思います。

◆ヒロシマ、残された9冊の日記帳

中川根中１年
久保奈都美

この話は、広島の県立高等女学校に昭和20年に入学した9人の最後の日までの日記帳の内容と、原爆投下後の広島の様子などをまとめたものでした。

9人の1日目の日記には、名門の女学校に入学できた喜びや先生のこと、それから早く勉強をしたいというようなことが細かく書かれていました。それでも日記の長さが長かったり短かったり、ピシッとして「入学式が挙行された。」などのかっこういい文章や、「今日入学式があった。」などかざらない文章もあったりしました。私はそれを見て、個性的で同じような文でもとらえ方がちがったりする所がおもしろいと思いました。それに、ざっと読むと戦争中に書かれたということを忘れそうになってしまうくらいでしたが、「いつも夕飯はおかゆですが、特別に普通のご飯をいただき祝いました。」と書いていた人もいて、戦争の雰囲気をただよわせていました。

4月9日の梅北トミ子さんの日記には、「朝曇っていたのに傘を持っていかなかったので、とうとう降り出して弟が持って来てくれた。でも帰りは降らなかったので気の毒だった。」と、弟を気づかうような文章が書かれていました。私はそれを見て、トミ子さんは弟思いな人だなと思って、少し和やかな気分になりました。でも、その4日後の日記には、弟が早く疎開して行ってしまったことが書かれていたので、私は戦争のせいでそんなことになってしまって気の毒だなと思いました。トミ子さんはその時、どんなことを思ったのでしょう。

6月13日の9人の日記は全て被服のことでした。その日は4時間ずっと被服だったようです。それでも「つかれた。」などの不満の言葉がなく、逆に「嬉しくてたまりませんでした。」とか、「始めから被服なので胸が躍る。」などの言葉が多かった所を見ると、みんな被服が大好きだったようです。

8月5日、原爆投下前日の日記を書いた人は4人だけでした。その4人の内の2人の日記には、「いつもこんなんだったらいいのになあと思う。」「今日は大変よい日でした。」と、明日の地獄のような日とのギャップが大きすぎるような言葉があって、胸がしめつけられるような思いがしました。明日もこんな日が続くと、みんなが思っていたはずだと思いました。

次の日のことは、筆者が女学校の生徒の保護者の方に聞いた話を、物語のようにして書いていました。私がその中で驚いたことは、日記が残った9人の内の1人の熊本悦子さんの父親が、「岡山で7日に広島に大変なことが起きるというわさを聞いて、悦子にとにかく気をつけるようにと言った。」私は、日にちは違うけどどうして広島に大変なことが起きるなんて知っていたんだろうと思いました。岡山でうわさされたということは、ほかの場所でもうわさされていたのでしょうか。

それでも9人は原爆からのがれることはできませんでした。原爆投下後、日記の9人は誰が誰だかわからなくなるほどのやけどを負って、みんな死んでしまったそうです。女学校に入学した1年生の内、一番長生きだった人でも23日しか生きられなかったそうです。手の甲とひたいに少しやけどをしただけなのに、それだけしか生きられなかったなんて……。原爆は目に見えない死も運んでくるんだなと私は思いました。

今、政治の世界では、憲法9条改正について議論されています。今まで私はそんなニュースを見ても、「あっ、そうなんだ。」ぐらいにしか思っていませんでした。でもこの本を読んで、戦争、原爆のおそろしさ、平和の大切さについて深く考えることができました。そして考えてみると、憲法9条の改正はやってはいけないと思うのです。あなたは戦争と平和、どのように思いますか。